



Title	子供向けテレビアニメにおける「オカマ」キャラの表象：性的イデオロギーと想定される参加者からの排除
Author(s)	木場, 安莉沙
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2017, 2016, p. 41-50
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/62058
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

子供向けテレビアニメにおける「オカマ」キャラの表象 —性的イデオロギーと想定される参加者からの排除—

木場 安莉沙

1. はじめに

近年、メディアにおける「おネエタレント」の起用の広がりや、「ボーイズラブ (BL)」
「百合」等と呼ばれる同性間での性愛を描いたフィクションの普及に伴い、それらをジェンダーの観点から研究する試みがなされてきた。また、性的少数者に対する差別の撤廃および人権や地位の向上を目指す社会的な動き¹の高まりとともに、性的少数者の表象は批判的に分析されるようになってきている。マリイ (2013) は、日本のメディアにおける「おネエキャラ／タレント」の表象を、メイクオーバー・メディア²における「おネエキャラ」の役割や、テロップの働きなどから分析している。堀 (2010) は「ヤオイ」(BL 作品の消費者：主に女性として想定されている) を「ゲイ差別者」だとする見方に反論しつつ、表象においてゲイが記号としてのみ用いられることで、ゲイの「他者化」がなされ「生身のゲイ男性を疎外」している可能性に言及している。さらに、河野 (2015) や Redmond (2015) は言語表現に着目し、河野は小説や映画などのフィクションにおける「おネエキャラ」およびバラエティ番組に出演する「おネエタレント」の言葉使いを、Redmond はボーイズラブ漫画においてキャラクターが用いる人称代名詞と文末表現を分析している。

しかしながらこうした研究において対象とされているのはいずれも成人が視聴することを想定されたコンテンツであり、子供が主な視聴者として想定されたものが考察されていない。仲田 (2013) によれば、大人と低年齢の子供の相互作用には「大人同士の相互作用以上に、その社会や文化の規範、ルール、コミュニケーションのパターンがより明白に示され」(仲田 2013:69)、子供は成長過程における遊びを通じて「対人関係の違いによる言語使用といったその社会文化における言語および言語規範を習得していく」(仲田 2013:98)。このように子供が周囲の大人によって示される言語行為から言語規範を獲得してゆくのであれば、子供が視聴するメディアにおいて性的少数者の表象が固定化され他者化されていた場合、現実の社会における性的少数者（特に「おネエ」として表象されることが多い男性同性愛者や性同一性障害者）の位置づけも固定化・他者化されたまま社会的規範として学習され、再生産されてしまう可能性がある。このため、子供向けのメディアにおける性的少数者の実態の把握が必要となる。こうしたことから、本研究では主な視聴者として子供が想定されたコンテンツを対象とし、そこに登場する「おネエ」キャラクターがどのように表象されているのかを言語やその他の手がかりから分析してゆく。

¹ 例えば 2016 年 6 月、厚生労働省は職場での性的少数者 (LGBT など) への差別的な言動がセクシュアル・ハラスメントに当たることを、事業主向けの「セクハラ指針」に明記することを決めた：

<http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi2/0000135967.html> (厚生労働省)

² マリイによれば、変容や改革を個人の消費と努力によって促す映像・活字・電子メディア。ライフスタイルに関するものが多いという。

2. 先行研究

前章で述べた通り、先行研究では「男ことば」（金水 2010 など）や「女ことば」（中村 2010 など）の使用から、役割語としての「おネエ」ことばに着目した「おネエ」キャラや「BL」キャラクターの研究がなされてきた。また、テレビの表象に見える文化的規範については片岡（2013）やマリィ（2013）などの先行研究がある。片岡（2013）はテレビ CM を対象としたマルチモーダル的な観点の分析から、テレビ CM において言語的・視聴覚的要因から「暗黙の裡に共有された文化的価値」を喚起するような語りが形作られることを明らかにした。またマリィ（2013）は、テロップに変換された「おネエキャラのことば」が文脈上の手がかりとして「ユーモアに富んだ非現実的な世界という文脈を生産していく」と述べている。さらにそのような「おネエキャラのことば」が、「女性性や男性性、もしくは異性愛規範にそぐわないジェンダーおよびセクシュアリティが規範的な性や性愛を脅かす挑発的なものではなく、単なるお笑いやボケ、ツッコミであることを合図する働き」（マリィ 2013: 73）を持つと論じている。本研究の分析対象はアニメーション映画であるため片岡やマリィの分析対象とは重ならないが、これらの先行研究のように言葉の背後で行われる語りの構築に注目し、キャラクターによって展開される談話がどのように文化的価値観やイデオロギーを暗示するのかを明らかにしてゆく。

3. 子供向けアニメにおける「オカマ」キャラ

3. 1 分析対象

主な分析対象として、数多くの「オカマキャラ」が登場し、尚且つ長年に渡って子供向けアニメーションとして親しまれている「クレヨンしんちゃん」の劇場版を扱う。「クレヨンしんちゃん」を扱う理由としては、子供向けアニメの中でも際立って「オカマ」キャラの登場頻度が高くキャラクターも多様であること、劇場版を扱う理由としては、テレビ版の「クレヨンしんちゃん」よりも劇場版の方が「オカマ」キャラの活躍シーンが多く表象を観察しやすいことが挙げられる。各映画のプロフィールは以下の表の通りである。

映画名/長さ	公開年	登場する「オカマ」キャラ ³ /出演時間
クレヨンしんちゃん アクション仮面 VS ハイグレ魔王/93 分	1993 年	ハイグレ魔王 地球の侵略を目論む宇宙人/14 分 53 秒
クレヨンしんちゃん ブリブリ王国の秘宝/93 分	1994 年	ニーナとサリー 悪の統領アナコンダの手下/51 分 18 秒
クレヨンしんちゃん ヘンダーランドの大冒険/97 分	1996 年	マカオとジョマ 世界征服を目論む二人の「オカマ魔女」/13 分 23 秒
クレヨンしんちゃん 暗黒タマタマ大追跡/96 分	1997 年	ローズ、ラベンダー、レモン 霊力のある珠を取り返すべく野原家と旅をする、武術に 長けた三兄弟/1 時間 2 分 46 秒
クレヨンしんちゃん 電撃! ぶたのヒツメ大作戦/95 分	1998 年	アンジェラ青梅 コンピュータウイルス「ぶりぶりがえもん」の開発者で ある大袋博士の助手/9 分 23 秒
クレヨンしんちゃん	1999 年	キラフィンガー・ジョー

³ 作品によって、登場人物が自称ないし他称によりキャラクターのことを「オカマ」と作中で明言しているものとそうでないものがある。「オカマ」と称されていないキャラクターでも、それまでの表象から「オカマ」キャラとして扱われていると類推できるものは考察の対象に含めている。

爆発!温泉わくわく大決戦/99分		風呂嫌いテロ組織「YUZAME」の幹部で指圧師/5分40秒
クレヨンしんちゃん 嵐を呼ぶ!栄光のヤキニクロード/88分	2003年	トラックドライバー ⁴ 悪の組織と対峙するため熱海に向かう野原家を助け、途中まで車で送った(固有名はなし)/4分55秒
クレヨンしんちゃん バカうまっ!B級グルメサバイバル/96分	2013年	トリュフ B級グルメ撲滅を目論む組織の一人/4分38秒

表1. 劇場版クレヨンしんちゃんと登場する「オカマ」キャラ

劇場版「クレヨンしんちゃん」は1993年から毎年一本ずつ公開されているが、「オカマ」キャラが一切登場しないものもある。また、男装で活躍する女性キャラクター、生まれた時から自身を女性だと思っており女性として生きている男性キャラクター(外見も非常に「女性的」である)、実在の「おネエ」タレントのオマージュとして登場するキャラクターなども存在するが、本紙では作中で「オカマ」と明言されたキャラクターや、そうしたキャラクターと類似した表象がなされているキャラクターを扱う。

3. 2 分析方法

本研究では劇場版「クレヨンしんちゃん」におけるいくつかの場面を書き起こし、言葉使いの他にもキャラクターの外見やそれぞれの場面において構築される談話を手掛かりとし、どのような表象が行われているか分析する。分析に際して特に、「オカマ」キャラがどのように他のキャラクターと差異化されているかに着目する。堀(2010)は、「ヤオイ」作品において「作者と読者が物語世界を共有するための道具立てとして「ゲイ」が呼び出されて」おり、「ヤオイ解釈共同体」である「われわれ」にとって「他者」としてゲイが描かれ、「社会的通念からの逸脱」として抽象化されていると述べている⁵(堀 2010: 40)。しかしそのような「ゲイを逸脱とみるステレオタイプ」はヤオイ作者に特有のものではなく、「広く社会に認知されている社会的通念」であると堀が指摘していることに留意しておきたい。本研究ではこの「他者化」が「オカマ」キャラに対してどのように行われているかを分析する。また、Goffman(1981)の参与枠組み(participation framework)を援用する⁶。Goffmanは、トークの聞き手は容認された参与者(ratified participant)とそうでない参与者とに区別されると述べている。さらに、話し手は多くの聞き手を前にして話しているときに、公的な聞き手の中でも特定の一人を意識して発言することによって、宛て手(addressed recipient)と非宛て手(unaddressed recipient)を区別することができると主張している。Goffmanは参与枠組みを主に対面相互行為に当てはめており、ラジオやテレビのトークの場合は想像上の(imagined)聞き手が想定されるためその場に視聴者が存在するトークとは異なると述べているが、テレビや映画の視聴の瞬間において発信者を話し手、視聴者を受け手と考えるなら、発信者と視聴者の間に参与枠組みが存在すると考えることができる。また物語に登場するキャラクター

⁴ これまでの表象と異なり外見や言動が「男性的」であるため「オカマ」キャラとして扱われているとは言えない可能性もあるが、それまでの「オカマ」キャラと表象が重なる点もあるため分析の対象とした。

⁵ 堀はこの「ヤオイ解釈共同体」における視線が「現実のゲイ」には向いていないこと(=「ねじれ」)を指摘し、それにも関わらずヤオイが「ゲイ男性との直接的な関わりを求める女性(=オコゲ)」と混同されていることの危うさを批判している。また、堀も指摘しているように、このような記号化や疎外は(性的アイデンティティに関わらず)女性がこれまで常に経験してきているものである。

間の相互行為にも参与枠組みは存在すると考えられる。堀の主張を例にすると、作者とヤオイ消費者は参与者として容認されているのに対し、社会的通念により記号化され他者化されたゲイは受け手として容認されていない、あるいは意識されていないということになる。ヤオイ以外のゲイないし性的少数者がキャラクターとして登場するコンテンツにおいても同じことが言える。本研究のデータにおいても、こうした発信者と視聴者ないし物語内での参与枠組みがどのように見てとれるかを考察してゆく。

さらに、そうした枠組みがどのような社会・文化的規範や共有意識から構築されてゆくのかを考察する。異性愛者男性の語りにおいてはしばしば「ゲイを「異質」なものとして排除し、自分たちを女性を好きな男の集団と自己規定しようとする意識」(風間・飯田 2010) が見られると言われているが、同じものが子供向けアニメにも見られるだろうか。

4. データ分析

本章では具体的なデータを分析してゆく。書き起こしに用いた記号は文末に付する。以下は「クレヨンしんちゃん アクション仮面 VS ハイグレ魔王」においてアクション仮面とハイグレ魔王が戦う場面を書き起こしたものである。S はしんのすけ(主人公)、A はアクション仮面(しんのすけと共に戦うヒーロー)、H はハイグレ魔王(悪役)を指す。

<シーン 1>

(塔の上から落ちそうになるハイグレ魔王を、アクション仮面が片足を掴んで助ける。しんのすけがアクション仮面に話しかける)

S: アクション仮面 どうして助ける↑の: 悪い奴なんだ↑よ

A: 剣で勝負するって約束した↑ろ こんなふうには勝ったって男らしくないじゃあないか

S: <ほ:ほ:>((頷く))

(アクション仮面、ハイグレ魔王を引き上げる)

H: **んっ**(空中で一回転し、態勢を立て直す)

(ハイグレ魔王、アクション仮面に向かって剣を構える)

H: その優しさが命取りになることを教えてあげる↑わ

A: **お前に教えてもらうことなど何も無い**

(戦い)

(後方に弾き飛ばされた自分の剣を見つめるハイグレ魔王と、話しかけるアクション仮面)

A: ハイグレ魔王(.) **貴様の負けだ**

(..)

H: ああ(..)

<分かったわ アクション仮面 あたしの負けだわ>((うなだれる))(..)

(顔を上げて表情を一変させ、挑発するようなポーズをとる)

な:んて言うと思ったら大間違いよ:

A: **男らしくないぞ(.)ハイグレ魔王**

(ハイグレ魔王、挑発的なポーズをとる)

H: ど::いたしまして: あたしは男じゃな:いの(.)オ:カ:マ

このシーンでは、アクション仮面/A(正義) VS ハイグレ魔王/H(悪)という二項対立が繰り返し強調されているが、Hを「悪」たらしめる要素として「オカマ」という属性が用いられている。Aは塔から転落しそうになったHを助けるという慈悲深さを見せるが、その行動の理由として、Hの転落によって勝利しても「男らしくない」からであると

Sに説明する。Sの質問は、同じ質問を思い浮かべたであろう視聴者(=受け手)の反応の先取り(辻 2010)をしたものであると考えられる。視聴者はSやAと同じサイドに位置づけられる傍ら、Hは他者として位置づけられるのである。HもAのこの行動を「優しさ」であると認めており、Aの慈悲深さはS、視聴者、さらに悪役であるHによって繰り返し確認される。この時、「男らしさ」が「正義」と「悪」とを分かつ指標として使用され、この指標においてAはヘゲモニーを獲得し、一方でHは下位に置かれる。その後Hは負けを認めずAを強引に更なる戦いに引きずり込むのだが、「**な:んて言うと思ったら大間違いよ:**」という台詞では表情と共に声のトーンも一変し、直前のしおらしくゆっくりとした話し方から声高で荒々しい話し方に変わる。これに対してAが「男らしくない」と再度「男らしさ」を指標として持ち出し、Hを非難する。これを受けてHは「あたしは男じゃな:いの(.)オ:カ:マ」と返答するが、ここで自らを「男」ではなく「オカマ」とすると同時に、「オカマ」が「男」とは異なる存在であるということが、(少なくとも映画公開時において)社会的に共有されたディスコースとして表出されている。なお、「あたしは男じゃな:いの」「オ:カ:マ」等Hの発話には音声の引き伸ばしが多く見られるが、今井田(2006)は「私はあ」「それでえ」といった語尾の引き伸ばしを「女性のステレオタイプと捉えられやすく、女性という性を強調するイメージがある」とし、「性を強調した話し方」に分類している。本紙で取り上げた例以外にも総じて「クレヨンしんちゃん」に登場する「オカマ」キャラの発話には音声の引き伸ばしが多用されていることから、「女性性」の付与のために音声の引き伸ばしが用いられている可能性が高い。

次の例は「クレヨンしんちゃん ブリブリ王国の秘宝」より、世界征服のため魔人の壺を求めて金の塔を上る悪役のアナコンダ伯爵とその手下のハブの後を、誘拐されたしんのすけとスノケシ王子(ブリブリ王国の王子)を連れたニーナ・サリーがついてゆく場面である。Sはしんのすけ、Saはサリー、Nはニーナを指す。

<シーン 2>

Sa: 目的のものって言ってたわね

N: <言ってた>((頷く))

(.)

Sa: オカマは欲張りなのよ((ニヤリと笑う))

N: 女以上にね((ニヤリと笑う))

(壺を求め塔を上って行くアナコンダとハブを見上げるニーナとサリー、しんのすけとスノケシ王子)

Sa: きつい

N: たか:い

S: オカマは飽きっぽいのよ:((挑発するように踊り始める))

『そんなのすぐ飽きちゃうんだよね:うふ:うふ:』

Sa&N: 『お黙り』

Sa: 行くかい((片手でガッツポーズ))

N: おっしゃあ((片手でガッツポーズ))

ここでもN・Saによって「オカマ」が自称されているが、シーン1のHとN・Saには異なる点もある。Hは中性的な外見で、Sが初見で女性と見間違えるという場面もあるが、N

は大柄でスキンヘッドにピンク色のスーツを着用しており、Sa は服装・身体つきともに女性性が強いものの、くっきりとした髭あとがあるため女性と見間違えることがない外見となっている。また N・Sa は大抵二人揃って登場し、度々相補的に振る舞う。シーン 2 での台詞回しも同様である。Sa の「オカマは欲張りなのよ」という台詞に N の「女以上にね」という台詞が続き、二人によって劇中での「オカマ」のイメージが協働的に構築されている。この台詞の中では「欲張り」の尺度を表すのに「女」が引き合いに出され、「女は欲張りである」という内容が含意されている。シーン 1 では「オカマ」は「男」の枠組みに当てはまらない存在として表象されたが、シーン 2 では「欲張り」という（「女」が持つとされる）特性を「女以上に」持つ存在として表象される。後に詳述するが、ここで「オカマ」に対して「男」「女」の比較のされ方が異なることにも留意しておきたい。さらに、高く長い階段を見上げてアナコンダ達の後を追うのを諦めそうになった N と Sa を S が挑発し、これに触発された二人が「行くかい」「おっしゃあ」と意気込むのだが、この時に声のトーンが荒々しく男性性の強いものになり、動作（片手でガッツポーズ）がその男性性を際立たせる。「～かい」という「男性語」として使用される終助詞（太田 1992）の使用も相まって、この場面では N と Sa の二人は感情の高ぶりによって「性別がおよぼす隠しきれない影響」（マリィ 2013）を発露し、普段「隠し」ていた（本質としての）「男性性」が表れてしまった、というふうに描かれている。シーン 1 においても H が感情の高ぶりによって声のトーンを一変させる場面があるが、シーン 2 では言葉使いやトーンがよりわかりやすく男性的に変化している。こうした描き方はマリィ（2013）が指摘したバラエティ番組における「おネエ」タレントの演出と重なるものであり、また河野（2015）が「“素”が出る現象」と呼んだものと類似する。同様の表象は、「クレヨンしんちゃん 暗黒タマタマ大追跡」においても顕著に見られた。

最後の例は、「クレヨンしんちゃん 嵐を呼ぶ！栄光のヤキニクロード」からの抜粋である。トラブルに巻き込まれた野原一家は、元凶である組織と接触するため熱海に向かう途中でヒッチハイクをすることになる。はじめはみさえ（しんのすけの母）が試みるも失敗し、代わりに女装をしたひろし（しんのすけの父）が挑んだところ、トラックが停車し一家を乗せてくれる。そのトラックのドライバーにひろしが迫られるシーンである。Hi はひろし、D はドライバーを指す。これまでのクレヨンしんちゃんに登場する同性愛者男性のキャラクターと異なり、このドライバーは外見も言動も「男性的」に描かれている。

＜シーン 3＞

（荷台に座るみさえ、しんのすけ、ひまわり、シロが、運転席および助手席の方をのぞき込む）
（助手席をまっすぐ見つめるドライバーと、冷や汗をかきながら正面を見つめるひろし）

Hi: ん（一瞬ドライバーの方を見る）

前見ないと危ないわ↑よ

D: 運命って信じるか↑い

Hi: ↑え（ドライバーの方を見て焦った表情）

D: 運命の出会いってやつさ（）俺はもうあんたに夢中さベイビー＝

Hi: =はっ h

Hi: そんなこと（）（左手でドライバーの視線を遮る動作）困るわ h あたし

あ:あ:赤赤:(**憔悴した表情**)
 (赤信号の交差点をひろし達の乗ったトラックが突っ切り、周囲の車が急ブレーキをかける)
 Hi: **<あつぶね:> 信号赤だった↑ぜ**
 D: 常識にとらわれるな
 (..)
 Hi: えっ(**冷や汗をかく**)
 (..)
 Hi: **あのさ: 騙して悪かったけど:(.)**(**かつらを取る**)**俺:男なんだ**
 D: 知ってたさ
 Hi: ↑へっ
 (..)
 女房と:子供も:いるんだ(**ゆっくりと荷台の方を指す**)
 (..)
 D: ((口をすぼめながら))も:::えるねえ

このシーンでは終始 Hi が冷や汗をかき憔悴した表情をしており、一方 D は表情を変えることなくまっすぐに Hi を見つめ続ける。終助詞「〜かい?」「〜さ」(太田 1992 など)、一人称「俺」(金水 2010) はいずれも「男性語」「男ことば」として用いられることが多く、フィクションにおいて主に男性キャラクターに使用される。またこのシーンでは危険運転をした D を Hi が「あつぶね: 信号赤だった↑ぜ」と非難し、D が「常識にとらわれるな」と応答するが、この応答には運転に関すること以外の含意がある。この台詞の直後にそれまで女性を装っていた Hi が焦った様子でかつらを取り、「女ことば」から「男ことば」に切り替え、自分が男であることを明言している(厳密に言えばその直前に危険運転に焦った Hi が男ことばを使用しているが、これは意図的でなく憔悴によって無意識に出てしまったものとして描かれている)。しかしその後もなお D の Hi への好意は変わらず、Hi に妻子がいることを伝えられても動じる様子はない。先述の D の言葉にあった「常識」には、性愛対象となる相手の性別や家庭の有無が含意されていたことがここで明らかになる。D はそうした「常識」から外れたところに位置づけられるキャラクターとなる。

以上のように、シーン 1 からは正義／悪の二項対立に「男」／(「男じゃない」)「オカマ」という属性がなぞらえられていること、シーン 2 からは「オカマ」キャラが「女」らしさを「女以上に」備えた存在として描かれつつも、「素」として「男性性」が描かれていること、シーン 3 からはキャラクターが「常識」から外れた存在として位置づけられていることが分かった。以下で詳述するように、こうした表象から「オカマ」キャラ達は堀(2010)が言うような「われわれ」(ここでは製作者と視聴者)の枠組みから外され、異質さを表出する記号として物語に組み込まれている。

5. 考察

5. 1 キャラクター表象にまつわる性的イデオロギー

上記の分析には、先行研究と重なるものもあった。まず、既に述べた通り河野の言う「“素”が出る現象」が見られ、「オカマ」キャラの女性性が「不十分な女性性」(マリィ 2013)として表象されていた。シーン 1 やシーン 2 で見たように、「男」「女」のどちらの括りからもキャラクターが外されていることが、この表象と関連しているだろう。この

「男」とも「女」とも異なる位置づけは、マリィが分析したバラエティ番組「オネエ MANS⁷」における表象と類似する。「オネエ MANS」の番組公式ウェブサイトでは、出演者の「おネエ」タレントが「男なのにオトコじゃない」、リニューアル版では「男なのに男じゃない、女性よりも女性らしい」と表象されたが、ここで引き合いに出されている「男」「オトコ」「女性」は、その指標としての役割が異なる。「おネエ」タレントは「男なのに」つまり（“素”が出る現象などの表象によって）「本質」的には男性であるとみなされるが、「オトコ」=ジェンダーとしての男性の基準を満たす存在ではないとされる。一方で「女性よりも女性らしい」とも説明されるが、「オンナじゃない」という説明はされない。もともと、番組内で度々「おネエ」タレントが「女」を自称するも周囲からそれを否定されるという演出がなされていることから、女性とみなされていないことは明確であり、そのことが当然視されているためにわざわざ言及されていないとも考えられる。「クレヨンしんちゃん」における「オカマ」キャラの場合も、「男らしさ」というジェンダー規範からは外されるが、外見や声に分かりやすく男性性を残す描き方や“素”（本質）=男であると仄めかす表象により、セックスは男性として描かれる。また、女性としては描かれていないが、女性が持つとされる特徴を女性以上に持ち合わせる、つまり「女性より女性らしい」側面を持つ存在として描かれている。まとめると、「おネエ」タレントや「オカマ」キャラが男女二元論に照らし合わされたとき、セックスとジェンダーという二つの指標が呼び出され、彼／彼女らはセックス上は（本質的には）男性であって女性ではないが、ジェンダーとしては男性でなく「女性以上に女性」である存在として表象されている。⁸「女性以上に女性らしい」というジェンダー表象は、理想的な「女らしさ」が男性によって規定されてきたという歴史的構造の焼き直しでもある。

5. 2 キャラクターの他者化と異性愛者である「われわれ」の構築

次に、シーン1からシーン3で見てきたようなキャラクター達が、どのように視聴者や描き手、主人公達から成る「われわれ」から切り離され他者化されているかを考察する。シーン1では、AとHは「主役 (protagonist)」対「敵役 (antagonist)」(Fairclough 2003) という二項対立に置かれていたが、ジェンダーとしての「男らしさ」を持つA対「オカマ」であり「男らしさ」に欠けるH、というふうに「男らしさ」の有無も二項対立を支える要因となっていた。この基盤となっているのは異性愛規範（ヘテロノーマティビティ）であり、異性愛規範というディスコースの共有によって上記のようなキャラクターの逸脱の理解が可能となる (Kiesling 2006)。従ってHは敵役としてAおよびS・製作者・視聴者から成る「われわれ」と対立する位置に置かれただけでなく、ジェンダー／セクシュアリティを共有しない「オカマ」であることによって他者化されている。Hは物語の中で二重に他者化されていると言える。シーン3のDはこれまでのキャラクターと違

⁷ 日本テレビにて2006年より放送が開始されたバラエティ番組。2009年に放送が終了した。

⁸ 無論、セックス／ジェンダーといった二項対立や、本質としての「男女」が存在するという考え方そのものにも問題がある。Butler (1990) はこうしたセックスやジェンダーの見方に異を唱えている。

い外見・言動ともに「男らしく」描かれているが、「女装姿の Hi に一目惚れ」「交通ルールの無視」「Hi の妻子の存在を気にしない」といった要素から、その「逸脱性」が構築されている。抜粋箇所の直前では Hi が女装姿でヒッチハイクに挑む様子が描かれるが、ヒッチハイクの瞬間を見たみさえ・しんのすけ・ひまわり・シロは表情を一変させ絶句する。このシーンの挿入により、それが女装姿の Hi が姿を作る様に対して（製作者から視聴者に）期待された反応であることが分かる。ところが D は「われわれ」に期待された反応に反し、Hi に一目惚れする。この逸脱性が「常識にとられるな」という台詞に表され、「われわれ」の常識にそぐわない他者としての色合いを強めるのである。

以上のように「クレヨンしんちゃん」における「オカマ」キャラは製作者・視聴者・主人公から成る「われわれ」から他者化されていることが分かったが、他者化されたのは作中のキャラクターだけでなく、現実の（男性）同性愛者ならびにしばしば「おネエ」として混同されるトランスジェンダーなどの性的少数者でもある。Goffman（1981）の参与枠組みを用いて考えると、製作者が意識的であったにせよ無意識であったにせよ、視聴者として想定されていたのは異性愛規範というディスコースを共有する異性愛者であり、そうでない人々は非宛て手もしくは容認されない受け手として位置づけられたと言える。

6. 結論

クレヨンしんちゃんに登場する「オカマ」キャラを通時的に見てゆくと、「女性的」な見た目や言動を誇張的に描いていた初期と比べ、2003 年の映画では「男性的」な同性愛者キャラクターが登場するなど、その表象は多様化したかに見える。また悪役として位置づけられるだけでなく、主人公を助けたり冒険を共にすることもある。しかし 2013 年公開の「クレヨンしんちゃん バカうまっ！B 級グルメサバイバル」では再び「女性性」が誇張された「オカマ」キャラが悪役として登場し、以前の表象へと逆戻りしている。こうした表象はバラエティ番組の「おネエ」タレントにも見られるが、あまりに画一的・固定的であるため、多くの問題を孕む。タレント一人一人をとっても、「本人のアイデンティティが男性であり、男性を性愛の対象とする人」や「本人のアイデンティティが女性であり、男性を性愛の対象とする人」など、個々によって性的アイデンティティは異なるはずだが、そうした差異が平面化され、混同されている。大雑把に分けると前者はゲイ、後者はトランスジェンダーやトランスセクシュアル、性同一性障害といった呼ばれ方をし、その中でも性的アイデンティティは個人によって異なるのだが、テレビ番組においては「おネエ」という括りのみが存在する。フィクションにおけるキャラクターの描き方もこうした現実世界における表象と重なる。作り手が自身の現実世界の捉え方をフィクションに反映させているとも言えるし、フィクションにおける表象が現実世界での表象をさらに強化しているとも言える。こうした表象は現実の性的少数者の人々にも影響し得る。以下は国際基督教大学ジェンダー研究センターのホームページに記載された、（当時）高校生の息子からカミングアウトを受けた女性へのインタビュー記事からの抜粋である。

カミングアウトの2日後位に見たTVアニメの悪役が『おかま』だったんです。『悪の大魔王はおかまのよ』って。毛むくじゃらに口紅で。このアニメは好きで昔からよく見ていたので愕然としました。もしこういう番組を息子が昔見て、LGBTを『悪者・皆の笑い者』と感じていたらと思うと、これはダメだ、止めないとして。いてもたってもいられなかったんです。

メディアは相互行為の媒体でもあり、特に幼い視聴者は相互行為から社会的規範を学ぶ。メディアにおける他者化が現実の人々の位置づけとして投影される可能性を、我々はより深く考慮する必要がある。

[付記: 書き起こしに用いた記号]

____ 筆者による強調 (()) キャラクターの動作 () 場面説明 : 音の引き伸ばし
太字 強い声調 (.) 小休止 (..) 比較的長い沈黙 < > 比較的ゆっくりとした発話
□ 発話の重なり = 間をおかずにされた発話 ↑ 直後の音の上昇 h 呼吸

[参考文献]

- Butler, Judith. (1990). *GENDER TROUBLE Feminism and the Subversion of Identity*, Routledge. (竹村和子訳 (1999). ジェンダートラブル 青土社)
- CGS Online 国際基督教大学ジェンダー研究センター (2008). インタビュー: NPO 法人「LGBTの家族と友人をつなぐ会」<http://web.icu.ac.jp/cgs/2008/09/npolgbt.html> (2017年4月7日アクセス)
- Fairclough, Norman (2003). *Analyzing Discourse: Textual analysis for social research* by Norman Fairclough, Routledge. (日本メディア英語学会メディア英語談話分析研究分科会訳 (2012). ディスコースを分析する 社会研究のためのテキスト分析 くろしお出版)
- Goffman, Erving (1981). *Forms of Talk*. University of Pennsylvania Press.
- 堀あきこ (2010). ヤオイはゲイ差別か?—マンガ表現と他者化 好井裕明 (編) セクシュアリティの多様性と排除, pp. 21-54. 明石書店
- 今井田亜弓 (2006). 若い世代の言語行動における“femininity”について ことばの科学, 19, 名古屋大学言語文化研究会, 141-156.
- 片岡邦好 (2013). 行為と知覚のナラティブ テレビCMのマルチモーダル分析から 佐藤彰・秦かおり (編) ナラティブ研究の最前線, pp. 273-293. ひつじ書房
- 風間孝、飯田貴子 (2010). 男同士の結びつきと同性愛タブースポーツをしている男性のインタビューから 好井裕明 (編) セクシュアリティの多様性と排除, pp. 93-124. 明石書店
- Kiesling, F. Scott (2006). Hegemonic identity-making in narrative. In A. De Fina, D. Schiffrin, M. Bamberg (eds.) *Discourse and Identity*, pp. 261-287. Cambridge University Press.
- 金水敏 (2010). 「男ことば」の歴史—「おれ」「ぼく」を中心に 中村桃子 (編) ジェンダーで学ぶ言語学, pp. 35-49. 世界思想社
- 河野礼実 (2015). 「おネエキャラ」の言語表現について—バラエティ番組とフィクション作品を材料に— 役割語・キャラクター言語研究国際ワークショップ2015 報告論集, 151-164.
- マリィ、クレア (2013). 「おネエことば」論 青土社
- 仲田陽子 (2013). ジェンダーに応じた子どもの談話ストラテジーの習得について 神田靖子・高木佐知子 (編) ディスコースにおける「らしさ」の表象, pp. 67-104. 大阪公立大学共同出版会
- 中村桃子 (2010). 「女ことば」の歴史—メタ言説からみる新しい視点 中村桃子 (編) ジェンダーで学ぶ言語学, pp. 35-49. 世界思想社
- 太田淑子 (1992). 談話にみる性差の様相—終助詞を中心として— 横浜国立大学教育紀要, 32, 329-342.
- Redmond, C. Ryan (2015). ボーイズラブマンガにおけるセクシュアリティと役割語—Linguistic Identity in Japanese Boys' Love Manga—役割語・キャラクター言語研究国際ワークショップ2015 報告論集, 138-150.
- 辻大介 (2010). CM言語の「断層」、一九五〇／六〇—広告としての自律化と受け手の内部化 高野光平・難波功士 (編) テレビ・コマーシャルの考古学 昭和30年代のメディアと文化, pp. 29-52. 世界思想社